

はじめての音

Wedge White

「妾の初体験か……？はあ……男子としてそれは気になるものなのう。それとも、深く人と関わつて来なかつたというのに、そういう関係に進んだ相手がいることが不思議なのか？まあ、それもそうかもしけんな。じやが、妾は何も愛し合つた者としたという訳ではない。いや、その……な。妾も女として生まれた以上はやはり、興味があつたのじや。男にしかないモノや、それを自分の体に受け入れた時に得られるという快感にな……。

それに、じや。妾は人前に滅多に姿を現さなかつたが、それは大人に限つた話じや。童の前にはよく顔を出し、共に遊んだりしておつたぞ。——そういう訳で、じやな。関係を持つたのも幼い男子だつたのじや」

*

「ぼく、最近変なんだ……」

「ふむ？ 変とは、どのように体がおかしいのじや？ 病氣だというのなら、薬になる草はある程度わかつておるぞ。それとも……」

妾が佳子と別れてから、いくつかの時代が過ぎた後。ある山間の村に長居することがあつた。そこの少年の一人に、妙に妾を意識してくる者がいて……まだ精通もしていない幼子ではあつたが、どうにも妾に興奮しているらしい。

からかうようにそう言つて。彼の反応を待つてみた。

「桐ちゃんと会つたり、桐ちゃんのことを考えたり擦ると、なんだか、こうつ、体がかあーつて熱くなつて……！ それで、桐ちゃんともつと仲良くなりたいなつて……」

「もう十分に仲は良いではないか？ たくさん遊んで、妾はお前を友人と思つておるぞ」

「そ、そうじゃなくつて……！」

彼は顔を赤くして言う。……可愛らしい。

「桐ちゃんの、特別になりたいんだ……」

「特別、のう。では、二人でしかできない遊びをするか？これは男子と女子、二人でなければできぬことじや。それも、互いを大切に思い合う……特別な関係でなければできぬ」

「そ、そんなことがあるの！？そ、それで、桐ちゃんはぼくのこと……」

「うむ。憎からず思つておるよ。そうでなければこんな提案、せんじやろう」

「じゃ、じゃあ……！」

ぱあっ、と彼の顔が明るく、興奮に彩られる。

……全く、男子とは単純なものだと思いながら。しかし、妾自身も胸が高鳴らない訳ではなかつた。

「とにかく、じゃ。これは他人に見られてはならぬ、一人きりでしなければならないことなのじや。確か村外れに今は使われていない蔵があつたじやろう？そこでしよう。少々古臭いが、まあ今すぐに崩れるようなものでもあるまい」

「う、うんつ！二人だけの秘密、だね！」

「うむ。秘密じや。決して誰にも言つてはならぬぞ？それが約束できるな？」

「うんつ。桐ちゃんとだけの秘密！」

妾はいつまでも幼子の姿をしている。だが、もう何百年も生きていた訳で、当然ながら見た目と精神での年齢の乖離は起きていた。

しかし、妾自身が初めてのことと、少々舞い上がつていたのは間違いない。彼と同じように

興奮し、ドキドキし……蔵へ向かつた。

ちなみに、当時は衛生がどうだとかという知識はなかつたので、見るからに不衛生な蔵で裸になることが問題だとは感じなかつた。むしろ、ちょうどよい隠れ家で……素敵とすら思つていたと思う。

「うむ、ここならばよいな。して……どうしたものか」

「えつ? な、何をするの?」

「ええと、じゃな……妾も知識としては知つてゐるのじやが、具体的にどうするのかは……とにかく、じや。下半身を見せてはくれんか?」

「えつ……? そ、それつて桐ちゃん裸、見せるつてこと?」

「うむ、そうなる……のう」

当然のようすに彼は赤面し、もじもじとして……しかし、どこか期待も混じつた涙目で妾の方を見る。

「桐ちゃんは、ぼくの裸、見たい?」

「興味はある、の……逆にお前は妾の裸が見たいか?」

「うん……見たい、な……」

「ならば……」

妾自身、胸が高鳴つてゐる。明らかに顔が赤くなつてゐるのもわかり、舞い上がる中……こ

う言つた。

「一緒に裸になろうか」

「うんつ……!!」

幼い者同士。妾は長く生きているといえど、性的な知識をほとんど持ち合わせていない、初めて同士の初々しい行動だつた。

おおおおおおと着物を脱ぎ、互いの裸を晒す。当然、相手の一物は小さな、子どものものであり、勃起もしていなかつた。しかし……。

「き、桐ちゃんの体、きれい…………」

「そうかのう？あまり他人と比較できるものだし、違いがわからぬが……」

「でも、すぐきれいだよ！すつごく可愛い!!」

「ふ、ふふつ……そう言われて悪い気はせんのう。お前の裸も……うむ、可愛らしいと思うぞ」

「うあつ…………」

「な、なんじや？」

ビクリ、と股間のモノが震える。幼いながらも異性。それも愛しく思う相手の裸を見て、本能的に男として興奮しているのだろう。

それを見て妾もまた、一層気分が高まつてしまふ。

「な、なにこれつ…………？おしつこしたい訳でもないのにつ…………んんつ…………!!」

そして、そのままモノは小さいながらも屹立し始める。小さいと言つても、妾の体も小さいのだから丁度いい大きさなのかもしないが……。

「それはな、お前が妾に興奮しておる証拠じや。このちんぽをな……こうやつて触られたりすると、心地いいじゃろう？」

「ふあああつ!?な、なに、これつ……!?こんなの、初めてつ……!!」

軽く肉竿を小突いてやると、それだけで激しく感じる。

思つた以上に男子は弱いものだ、と思わず得意になつてしまい、更に刺激していく。

「ふふふつ、こうやつて女子にちんぽを心地よくさせられる……これが男女二人きりでする“秘密のこと”じや。本当は大人がすることなのじやがな、しかし、お前は妾が好きなのじやろう？」

「う、うんつ……！うつ、ふあああつ!!だ、大好きだよ、桐ちゃんつ……一気持ちいいのもつ、んふあつ!!すきつ……！」

「そうか、そうか……妾も可愛く喘いでいるお前が好きじや。そのままもつと心地よくさせてやつてもよいか？」

「うんつ……!!もつと、もつと欲しいようつ!!」

「うむうむ、そうか。では……」

きゆうつ、と根本近くを握り、そのまま先端までしげいていく……。

「ふああああんつ！い、いいよつ、それつ……！すぐくつ……ううううつ！」

「ふふつ、ちんぽがビクビク震えよる……それにすごく温かい…………」

「あつ、あああつ……！ど、どうしようつ？おしつこ、漏れそうつ……！」

「なつ！い、いや、それは我慢してくれんか!?お前のおしつこ塗れにはなりたくないぞ……」

「ご、ごめんねつ！で、でもつ……！」

「うひやあああつ！?」

突然、皮被りの先端からじわりつ、と半透明の液体が流れ出した。

ドロツとしたそれは、ちんぽを掴んだ妾の指を垂れ落ちていく。

「あ、れつ……？おしつこじやない……？」

「これは……精液というものなのじやろうな。ふふつ、お前は今までこんなものを出したことがなかろう？妾が初めてお前を大人の男にしてやつた、ということじやな」

「こ、これが大人になつたつてこと……？」

「うむ。それが子種、赤ちゃんを作るために必要なものらしいのじや。それを女子の中に出すこと、子を授かれるといふ……まあ、手では子どもなどできぬから、これは無駄撃ちといいうものじやが」

「そ、そなんだ……桐ちゃん、なんでも知つてるんだね」

「ふふつ、お前より少しばかり長く生きておるからな。どれつ……れろつ、ちゆるうつ……ん、

んむうつ……味はあまり美味くはないのう」

「ええっ!?そ、そんなの舐めていいの!?」

目を丸くする彼を見て微笑ましく思いながら、しかし想像以上の酷い味に少し落胆する妾がいた。もつとこう、女子が男子を気持ちよくさせた証なのだから、上等な味なのを想像していた。これでは、あまり飲みたいとは思えない。

「……しかし、妾も一通りのことは経験したいからな」

「えつ？」

「今、妾は手でちんぽを気持ちよくさせたがな……これを口で咥えるやり方もあるのじや。それを試してみよう」

「お、おちんちん咥えるの……？」

「うむ……少し覚悟はいるがの。しかし、できるだけのことはやりたい。してもよいか?」

「い、いいけど……でも……桐ちゃんに酷いことはしたくないから……」

「気にせんでよい。妾がしたいと言っていることなのじや。お前が罪悪感を覚える必要はなかろう」

「で、でもう……んふあつ!あつ、ああつ……!こ、これつ……!!くつ、ふあああつ!」「んむむううつ……!!れろおつ……れろじゅつ、ちゆるつ、じゆるじゆるつ……んむつ、ふうつ……んふつ、なはなはつ……おもひろい感覺じやつ……」

「く、口の中、震えてつ……ふあああああつ!?」

小さいモノとはいえ、妾が咥えるとまともに喋れないほど口内がふさがってしまう。
まだ少し、精液の絡みついているモノは、やはりまずかつたが……だが、不思議とちんぽを咥える、その行為自体は嫌だという感じがしなかつた。彼が喜んでくれるのが嬉しかつたのだろう。

「じゅるじゅつ……れろつ、れるむううつ……じゅつ、じゅつちゅつ、じゅるるううつ!!」
「き、桐ちやつ!!ごめつ、また出つ……!!くつううううんつ!!」

「んむううううんつ!?むつ、んあむうううつ!?」

突然、震え出したモノが精液を吐き出していく……ぴゅつ、ぴゅつ、と中々切れない尿のようには飛び出した精液は、量は少なかつたがそのえぐみを口内に残していき……思わず吐き出してしまいそうになつたが、それは彼に失礼だから……頑張つて飲み下す。

「んんつ……んじゅつ、ずずるうつ……んつ、むうつ……」

「あつ、ああつ……桐ちゃん、飲んじやつた……?」

「あむうつ……んつ、この通りじやつ……ああんつ……」

「そ、そんな口を開けて見せるなんて……は、恥ずかしいよつ……」

「んふつ、可愛いのう、お前は。しかし、うむ……妾もわかつてきたぞ。ちんぽというのは本

当に敏感なんじやな」

「う、うんつ……ぼくも初めて知ったよ……こんなに気持ちよくなれるんだ……」

「お互い初めて同士、貴重な体験ができているのう。——さあ、そろそろ本番と行くか」

「本番……？」

きよどんとした顔で妾を見る彼が可愛らしい。

「うむ。子作りの本番じや。まあ、妾たちは子どもゆえ、まだ実際に子どもを作れはせんのじやがな。妾の親たちがしていたのと同じことをしよう」

当然ながら、嘘だつた。妾は今の姿で成熟していると言えるが、人間との子どもは作れない。いや、そもそも座敷童 자체が子どもを作らない種族だ。

そして、妾に親がいるというのも嘘。しかし、今の妾はあくまで彼の友達、ただの人間の女の子でありたかつた。

「と、父ちゃんたちがしてたこと……いいの？」

「そつちこそ。妾はしても構わんと思つておるぞ？」

「そ、それなら、ぼくも……桐ちゃんと子作りごっこ、してみたい！」

「ふふつ、ごっこ、か。うむ。ごっこ遊びだが、こういうのは経験を積んでおくのに越したことはなかろう。楽しもうな。由兵衛（ゆうべえ）」

「う、うんつ……！」

これまで一度も名前を呼んでいなかつた妾が、突然名前を呼んだことに驚いているのだろう。

戸惑つたように笑い、しかし、嬉しそうにしていた。

「そのちんぽをな、妾のここに挿れるのじや。どうじや、わかるか？言つておくが、挿れる穴を間違えるでないぞ……」

「えつ！お、女の子つてこんな風になつてるんだ……！」

「うむ、ちんぽが女子にないことは知つていたが、実際にどうなつているかは知らなかつたじやろう？この穴、じや。自分で挿れられるか？」

「え、えつと……」

もじもじとする彼。可愛らしいが、いつまでも待つてはいられないでの……思い切つて妾の方から飛び込むようにしてすり寄る。

「うわっ……！」

「じつとしておれ。妾が導いてやろう……んつ！」

「あつ、ああつ……桐ちゃんのここ、濡れてる……？」

「うむ……お前が子種汁を出したように、女子もまたちんぽを受け入れるため、こういつたものを出すのじや……興奮しているとたくさん出るのじやぞ」

「桐ちゃん、すつごくいっぱい……興奮してくれてるの？」

「うむつ……」

自分ではわかっていたことだが、改めてそう言われて……恥ずかしくて赤面してしまう。

だが、だからこそ早く彼を中で迎え入れたくて……思い切って腰を持ち上げ、先端を咥え込んでいく。

「うつ、くううつ……!!」

「うああああつ!?き、桐ちゃんつ……!」

「んつ、ふふつ……濡れているとはいえ、これは中々大変そうじやなつ……。だが、安心せい……きちんと気持ちよくさせてやるから、なつ……!うつ、くああああつ……!!」

入り口で彼のモノを咥えたことを確認して、一気に腰を下ろす。

未経験の中が押し広げられていくのを感じると共に、勢いよく下ろしたものだから……ぶつんつ、と中で何かが切れたような感覚と共に、鋭い痛みが走った。

「き、桐ちゃん、血がつ……!?怪我してるの……?」

「んつ、くつ、うあつ……!!だ、大丈夫じや……こういつたことを初めてする女子はな、こうして血が出るものでな……。んつ、ふうつ……痛みもあるが、これがお前に妾の初めてをあげられた証じや。むしろ誇りに思つてほしい」

「ぼくが、桐ちゃんの初めて……」

「うむ。そして妾はお前の初めての相手じやぞ。こんなに可愛い娘と初めてを経験できたのじや。ありがたく思うんじやぞ?」

「うんつ……桐ちゃん、大好きつ……」

さすがに処女喪失後、すぐに動くこともできず、そんなことを言いながら……幸せそうな彼の顔を見つめる。……妾も同じような顔をしているのだろうか。

だが、少しだけ寂しさもある。彼にとつてこれは間違いなく性行為だが、妾は人との子を作れないのだから、妾にとってのこれは予行練習ですらない、ただの“ごっこ遊び”だった。

「（しかし、こうやって気持ちよさそうにして喜ぶこやつの顔を見れただけで嬉しい、な……。他の生き物は交尾に命すらかけるというに、人はそれを娯楽ともするようじやし、のう）」

呆れたような、感心したような。しかし、彼があんまりに嬉しそうだから。

「んっ、よい、しょっ……少し動こうか。中に挿れただけでは子種を出せないじやろう?」

「う、うんっ……。でも、ぼくは桐ちゃんとつながつてるだけで嬉しい、よ?」

「甘えた目で見るでない。子種をちゃんと出してこそその行為じや。そら、動ぐ、ぞつ……うつ、くうつ……！」

腰を持ち上げ、彼のモノが中を通過していく感覺を味わう……残念ながら、初めてだからなのか、妾が人ではないからなのか、快感を覚えることはできない。しかし、彼は気持ちよさそうに目を細めた。

「うつ、ふああつ……い、いいよ、桐ちゃんつ……！桐ちゃんの中、絡みついてつ……！く

つ、ううううつ……！」

「ふ、ふふつ……よつぱどイインじやな?ほれ、もっと動かしてやろう……思い切り出してく

れて構わんぞ?どの道、妾たちは子ども。本当に子作りはできんのじや」

「うつ、ううううううつ……！」

持ち上げた腰を下ろすと、ぱちゅんつ、という水音がした。それが頭の奥にまで響くようで快楽はなくとも、興奮が加速する。

「んつ、くうつ、ふつうううつ……！ほれ、どうじやつ……？妾とできて、嬉しいか……？」

「うんつ、嬉しいよつ……大好き……！桐ちゃん、桐ちゃんつ……！」

「うつ、くあつ、んつ……!!な、中でもっと大きくなつ……も、もうつ、中がお前でいっぱいいやつ……！」

「はあつ、はあ、はあああんつ……!!」、「ごめんつ……！もつと桐ちゃんと楽しみたいんだけどつ……！で、出るつ……！」

「うむつ……存分に出すがよい……。早いなどと軽蔑はせんぞ。むしろ、可愛いお前が見れて満足じや」

「あつ、あああああ！！」

「んふつ……!!」

ビクンツ、中で肉棒が激しく脈打ち、膣壁が密着しているためか、その中を精液が駆け上がりしていくのがわかる。そして、先端から吹き出せば……。

「あつ、ああつ……!!」、「これえつ……！い、今までよりずつと多いつ……！」

「あつ、ああああああつ！と、止まらないよおおつ……！」

「はあつ、あつ、あああつ……！お、溺れてしまうつ……！中あつ、あふれるうつ！」

「うつ、くあああああ！」

肉棒はどんどん妾の中に精液を送り込んでいき……やがてそれが止まると、なんとも言えな
い充足感と、本当に彼と性交をしたのだという……満足、だろうか。そんな気持ちが溢れてき
た。

「あつ、あつ、ああつ……」

「もうつ、女子の方にこそ負担がかかるだろうに、お前の方が息切れしてどうする？妾はまだ
まだ元気じやぞ」

「う」、ごめつ……でも、桐ちゃんに……大好きな桐ちゃんに赤ちゃんのもと出せるとと思うと、
それが嬉しくて……。いっぱい、出しちやつた……」

「そうか、そうか。可愛い子じやな……」

荒い息をしている彼の頭を、妾は優しく撫でた。まだ中に彼を感じているというのに、赤子
をあやすように頭を撫でていると、妙な気持ちになつてくる。しかし……。

「（妾からすれば、どんな人間の老人も赤子同然じやな。……うむ。妾は人の母と考えていい
のかもしけん）」

そんな気持ちがして、いつまでも彼をあやし続けていた。

「おーい、そろそろ帰るぞ。陽が落ちてしまう」
 「う、うんっ…………あのさ、桐ちゃん。ぼくだけ楽しんじゃったけど……大丈夫？ 痛くな
 い？」

「そうじやなあ……正直、まだ少し痛い気がするのう」
 「や、やつぱり…………！」

行為の後。着衣を正した後、申し訳無さそうに彼が見てくる。

「しかし、な。これは幸せな痛みだと思う。この痛みが妾とお前の……愛の証じや。ただの子
 どもの遊びかもしけん。しかし、たしかに今日、妾とお前は結ばれたのじや。…………本当に妾た
 ちが結婚ができるという訳ではない。しかし、体と心が間違いなく通じていた。……お前も、
 そう思うじやろ？」

「う、うんっ…………ちょっと難しいけど……ぼくは桐ちゃんが大好きだよ。それは間違いない：

「ふふっ、…………」

「ふふっ、まだまだ坊やには難しかったかのう？」
 「き、桐ちゃん…………」

「そうやつて笑つて。二人で手をつないで帰つた。

まだ膣内には精液が残っている感覚があり、膣口からは精液が垂れている心地がしたが……
 むしろだからこそ、今日の特別さを感じられて嬉しかった。

「さて、また明日、な。…………何度も言うが、今日のことは秘密ぢやぞ？誰かに話したら
もう二度と会つてやらんからな？」

「う、うんっ……！桐ちゃんが大好きだから、秘密にしてる……」

「ふふつ、そうかそうか。ならば妾もずっと、お前の傍にいよう。ずっと、な」

結局、彼と行為をしたのはその一回きりで。それからは普通の友達として過ごした後、彼が
青年になる頃にはもう、妾は彼の目の前からいなくなつていた。

しかし、その日の約束の通り、彼が幸せな夭寿を全うするまで。
妾はこの村にいて、彼らを見守り続けていた。

はじめての音

2019年12月 5日 初版

奥 付

著者 Wedge White

URL <https://wedgewhite-team.wixsite.com/home>

E-Mail konjyoyasuhiro@gmail.com

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
[\(http://tokimi.sylphid.jp/\)](http://tokimi.sylphid.jp/)